

●はなせ診療所そよ風だより No 5 2

2015年1月内科 吉澤泰介

●2015年、明けましておめでとうございます。

例年がない、どか雪で大変な状況ですが、今年も身体と相談しながら、無理な動きは慎んで、しかし無理にでも笑顔を作って、(はなせ診療所だより No48 で説明したように悲しい時も、笑顔(^-^v)を作ると幸せホルモンのドーパミンが出ます。)で生きていきましょう。今年もどうかよろしくお願いたします。

私はこの正月休みに、故郷の広島市で母親の卒寿の祝いを、親戚一同で祝ってきました。母は、日常生活は、何とかこなせますが、自己主張が強く絶対に自分を曲げません。これも、認知症のひとつの現れかなとも思いましたが、姉夫婦が見てくれて感謝しています。

私はもともと長男ですが、家を守るという意識が希薄で、それは何故かと言うと、昔から母から、「吹けば飛ぶような小さな家なんて守る意識はいらない。そんなことより、人の役に立つことをしなさい」と教えられてきたからです。思えば母は、ジャワ(今のインドネシア)に若い頃、海軍関係で行って、当時では、まれでハイカラな娘時代をおくりました。(私も、学生時代に半年余り海外アジアを歩いたことがあります)。ですから、花背にきて一番驚いたのは、若い方の、家を守る意識の高さでした。でも、その奥に流れてるものは、長男が家を守るとはつまり、お墓を守り、育ててくれた親に感謝して、年老いた親の面倒を見ると言うことなのだということに、遅まきながらも思い至りました。私は幸いなことに、実の母を見れない代わりに、同居してる妻の親をみさせてもらっています。でも、実は私の方が、みてもらってるのかもしれませんが(^-^v)。

また今年の正月に、栗田勇さんという方が書かれた『良寛』と言う本を読みました。まるで良寛本人が、行間からたちのぼってくるような素敵な印象を与えてくれる本でした。一般には子供と手まりのイメージが強い国民的英雄と言える『良寛』さんですが、その奥底に、彼を支えた三つの精神の柱があり、一つは深い宗教性、特に臨済宗の師祖、道元が書いた正法眼蔵(しょうほうげんぞう)の中にみられる自分を厳しく律し、純粹に道を求めようとする求道者としての生き方、2つ目は、奥の細道を旅した芭蕉や、その芭蕉が師と仰いだ西行(さいぎょう)法師にみられる如く、漂泊(ひょうはく、旅を続けること)し、その中で感じとったものから作られた詩歌をたしなむ文芸の心、3つ目は、道教、禅に流れる様々な、社会と言う人の作ったしがらみから解き放たれた中国の『寒山拾得かんざんじつとく』に描かれているような仙人のような生き方をめざしたとありました。私自身の、今一番の関心のひとつにいかにしたら、人の言葉や物事にこだわる自我を捨てられ、他者を生かしながら共に自然体で生きれるかという点であり、そのひとつの示唆を与えられたような気がしました。しかし、良寛さんのような天才だからできたという見方もあるかもしれませんが、一歩でもあきらめないで研鑽し、近づく努力は続けたいものです。

●診療所に強力な助っ人登場。

最新の現代版の聴診器ともいえる手のひらサイズの超音波エコーVScan を、導入しました。外来患者さんは、今より早く大きな病院に紹介可能となり、施設に入所された方は、より診断能力が高まり、より早く治療可能となりました。積極的に活用し、皆さんの健康増進に役立てたいと思います。